慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クルト・サラムン著『イデオロギーと啓蒙 : 世界観理論と政治』
Sub Title	Kurt Salamun, "Ideologie und Aufklärung : Weltanschauungstheorie und Politik"
Author	萩原, 能久(Hagiwara, Yoshihisa)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1990
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.63, No.3 (1990. 3) ,p.141- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19900328-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的根拠を提供しているのであり、本書をアメリカ政治を取り巻く知的状況を反映したものとして読むこともできるであろう。

久保　文明

Kurt Salamun,
Ideologie und Aufklärung:
Weltanschauungstheorie und Politik.
(Böhlau Verlag, Wien/Köln/Graz, 1988, 142 Seiten)

クルト・サラムン著
『イデオロギーと啓蒙——世界観理論と政治』

一

かつてC・P・スノーが、現代ヨーロッパ、特にイギリスにおいて見られる自然科学的文化と人文的文化の隔絶という問題をその講演の中で報告して以来、この問題は少なくとも一時期、ある種のブームを巻き起こしたかの観がある。だが今日、それと同じような隔絶が政治学というひとつの学問分野の中でも見られるのである。そこでは、一方で自然科学をお手本にし、統計的、数理的モデルを駆使した科学的政治学があり、他方で主として政治思想研究家からなる伝統的な人文的政治学が存在し

続けているのである。前者の政治学者の多くは口にこそ出さずとも、後者のタイプの政治学を、思弁的な空理空論のたわごとであり、政治学の科学としての発展に百害あって一利なしと考えている。逆に口の悪い後者の側から言わせれば、前者の「科学至上主義者」など、そもそも「政治」の何たるかがわかっていないということになる。当面のところは両者が没交渉の関係を保つことで、こうした相互の無理解、対立が深刻化するという事態は回避できているが、この対立のはざまで、いくつかの政治学的主要問題が、そのどちらの側からも、相手側の領域の管轄事項とみなされたまま手つかずに放置されることになってしまっているとするならば、それは由由しき事態であると言わねばならない。「イデオロギー」とは、まさにそうした問題のひとつであろう。

イデオロギーを単に「政治的世界観」、「政治意識の形態」という中立的な概念と理解し、その現実的機能の分析にのみ終始してしまうのは、この概念が歴史的に担ってきた意味を不当なまでに矮小化してしまっているという、そのことだけからしても明らかに不充分である。それ以上にこの「中立的」理解は、イデオロギーが「思想」であり、しかも「人を動かす」思想であるということを無視することで、その思想の内容にまで検討を加えようとしない。しかしイデオロギーの「思想」としての側面を強調しすぎることは、逆に、イデオロギー解釈、イデオロギー批判の方法を、思想解釈の方法と同じく、著しく主観化・秘教化してしまうおそれがある。そうなってしまうと、イデオロギー批判の作業には人文的知識をふんだんに身につけた一部の天才的洞察力の持ち主――ここではマルクスやアドルノ、ハーバーマスといった天才を想起するだけで充分だろう――にのみ可能な名人芸的テクニックが要求されかねない。この両極端な立場を橋渡しし、それ自身きわめて厄介なものであるイデオロギーという問題群に可能なかぎり〈客観的〉に接近しようと試みているのがここに紹介する本書である。

二

著者クルト・サラムンは一九四〇年生まれで、現在、オーストリアのグラーツ大学哲学研究所助教授の職にある。彼には本書に先だって、エルンスト・トーピッチュと共著の Ideologie. Herrschaft des Vor-Urteils. 1972 および Ideologie, Wissenschaft, Politik. 1975 という著作があり、それ以外にも、多くのイデオロギー論に関する論文がある。本書は、これらの既発表の論文に、一部書き下ろしの論文を加えて、四つのテーマごとにそれぞれ二編の独立した論文を配列するという構成をとっているが、内容的にも彼のライフワークとでもいうべきイデオロギー論の現時点での一応の総括であると位置づけられよう。（彼のもうひとつの研究テーマとして、ヤスパース研究があるが、ここではそれには触れない。）

彼の在職するグラーツ大学といえば、トーピッチュを中心と

した「イデオロギー批判のグラーツ学派(Grazer Schule der Ideologiekritik)」(P. Ch. Ludz)という呼称を与えられるほどの、知る人ぞ知るイデオロギー論のメッカである。トーピッチュの強力な影響のもとに形成されたサラムンの立場は、ひとことで言うならば、彼の師たるトーピッチュの業績を継承しつつも、それにカール・ポパーの批判的合理主義とマックス・ウェーバーの社会科学方法論をミックスさせつつ、実存主義的な諸問題に対してあえて分析哲学的にアプローチするという、極めて異色なものである。科学のみならず、社会的問題においても、批判と合理的な議論の不可欠性を強調するという彼の基本的立場からイデオロギー問題へのアプローチを試みた本書の構成は、以下の通りである。

第一章　イデオロギーと言語
1　政治における言語戦略
2　スターリン支配体制下での「マルクス主義」という言葉の政治的用いられ方について

第二章　イデオロギーと政治
1　政治における過度なイデオロギー化の可能性と危険性
2　イデオロギーによる紛争激化傾向

第三章　イデオロギーと科学
1　科学のイデオロギー化の諸形態
2　イデオロギー、真理、科学をめぐる論争史について

第四章　イデオロギーとスポーツ
1　スポーツの政治的・イデオロギー的機能
2　世界観としてのオリンピック——スポーツイデオロギーへの批判的考察

以下、各章の内容を簡単に紹介してみたい。

三

まず、第一章では、今日でも多くの政治哲学者、政治学者によって採用されている「規範的」政治観が批判される。この政治観が、「政治行動の決定的な要素」、すなわち「政治が常に公的問題における影響力要素、決断要素を獲得、ないしは保持しようとする希求」(S. 12)という側面を持つということを過小評価しているからである。著者はこれに対して、M・ウェーバーとともに「権力」という契機を政治の不可欠の前提と考える。そうである限り、政治においては、他者の態度決定、確信、期待、行動様式に何らかの形で影響を与えるための、その手段が重視されよう。そこで著者が注目するのが「言語の使用」である。言語は、単に複雑な情報を広範に伝達するのに役立つという機能を有するだけのものではなく、他者の行動を操作し、感情的な反応を喚起するという働きを持つ。いわば言語は、高等動物にもすでにみられる多機能嚮導システム (das plurifunktionale Führungssystem)(トーピッチュ)、すなわち、情報伝達、

行動統御、感情的反応の三者が結びついた個体の行動プログラムの発展したものと考えてよい。そこで著者は、具体的な例を挙げながら、政治の世界における言語の使用とその濫用――著者が「言語戦略（Verbalstrategien）」と呼ぶもの――に分析の焦点をあてる。その際の分析の対象は、明白なプロパガンダのみにとどまるものではない。婉曲的表現や美辞麗句、メタファー、流行語、さらには疑似記述的命題や空虚定式(Leerformeln)、一事が万事的な十把ひとからげの(Pars-pro-toto)議論、ポジティブな、あるいはネガティブな連想喚起的手法――これらの言語戦略の日常政治における使用の背後に、どの様な人間の心理的メカニズムが隠されているかが問題なのである。

著者サラムンは、これらの戦略を政治において用いることが直ちに非道徳的であると非難されるべきなのではないとしながらも(S. 26)、この様な戦略を用いる際に、政治家にはウェーバーの定式化した「責任倫理」的基本姿勢が要求されると考える。「説得作業や影響力行使が用いられるあらゆる状況において、それにいかなる帰結や副作用が伴いうるものであるのか、責任倫理を意識して比較秤量することが重要である。」(S. 27) しかし、責任倫理は方法態度の問題であり、それ自体は内容的に無規定なものにとどまる。そこで、サラムンはさらに「具体的・内容的な価値尺度」として、政治における言語使用に際しての「誠実さという戒律(das Gebot der Wahrhaftigkeit)」をも要求する。

もちろんサラムンはイデオロギーの問題が単純に「倫理」、「良心」の問題で解決できると考えるほど無邪気なわけではない。「誠実さと責任観は、政治において生起する暗示的な影響力行使を修正・コントロールするための必要要件ではあっても、決して十分条件ではない。それ以上に必要なのは、できるだけ多くの公的批判と政治教育という付加的要件であり、それがあってこそ、こうした言語戦略の使用と結びついた大衆操作の効果を可能なかぎり中和化させることができるのである。」(S. 28) この彼の言からも明らかなように、「成熟した市民(der mündige Staatsbürger)」、明確な意識と反省能力をそなえた市民の育成、こうした啓蒙の政治プログラムこそがサラムンの理想であることにまちがいない。

さて、言語には往々にして時代、社会によって、その本来の意味とは異なったイメージや意味が込められるようになる。その顕著な一例として、この章でケース・スタディー的に分析されているのが、スターリン体制下における「マルクス主義」という言葉である。それは、時代と社会的背景の中で、ある時は「国家公認の教説」として、権威の証しであり、また「科学的認識」の代名詞であった。同時にそれは一枚岩的な世界観の源泉をも提供していたのである。

続く第二章ではイデオロギーと政治の関係が多面的に分析されている。このことは彼の周到なイデオロギーの定義づけにもすでにうかがえる。すなわち、イデオロギーとは、「社会の集団によって、社会的現実を解釈する際に一般的な方向づけ枠組

みとして用いられる〔機能的側面〕思考構築物であり、政治生活におけるこうした集団の権力要求を正統化し〔正当化的側面〕、真に科学的な洞察のかたわらで、公然たる評価、規範、行為への訴え掛け、さらには暗黙の規範的観念や偽りの観念を含む〔認識的側面〕ものであり、そしてこの不当な真理要求と非真理は、その生産者ないしは信奉者の利害制約的かたよりに還元可能〔因果的側面〕なものである。」(S. 53.〔 〕内は評者による整理である。)

この定義に基づいて、著者サラムンは様々なイデオロギーに共通して見られる構造的傾向を類型化してみせる。敵対感情をあおるイメージ形成、絶対的真理への要求、マニ教的な救済願望的理念、二極カテゴリー的世界把握（白か黒か、敵か味方か）、本質把握の幻想といったものがそれである。これらの傾向に対して、ここでも著者の啓蒙的政治プログラムと科学へのオプティミスティックなまでの信頼が顕著に見て取れる。「こうした諸傾向の批判的分析とともに、自由・啓蒙の人間的な価値基準に方向づけられ、それ自身、政党間での権力闘争のプロパガンダの道具に唯々諾々と巻き込まれてしまうことのない科学的なイデオロギー批判は、政治教育と平和教育にとって非本質的ならざる貢献をなしうる」(S. 66)だろうと。

イデオロギーに科学を対置するという、こうした楽天的なまでの科学への信頼は、逆に科学のイデオロギー化への敏感さとなって現れる。この事態は厳密に言うならば、科学のイデオロギー化ならぬ「イデオロギーの科学化」(S. 72)に他ならない。第三章では、こうした科学のイデオロギー化諸形態が、スターリン体制下でのルイセンコのケースや、ナチス時代の「ドイツ物理学」を例に分析、批判されている。著者はここでもウェーバーを引き合いに出しつつ、問題の中心を科学と価値との関係にあるとみなし、「価値自由」の今日的意義を問い直すという作業をおこなっている。この問題に関して、基本的には著者サラムンは、1科学的認識の(a)成立連関と(b)基礎づけ・テスト・正当化連関、(c)利用・作用・使用連関の区別をすることと、2科学内的な価値と科学外的な価値を区別することが重要であると考える。そして科学者自らが行う評価行為、価値判断を1の(a)と(c)のレベルでは容認し、同時にまた、2における真理や客観性、批判可能性、明晰さの希求という科学内的価値、理想の存在を認めつつも（この二つの意味で科学は「価値」から自由ではない）、1(b)のレベルに個々の科学者の価値観が介入してはならないこと、また2の科学内的な価値が、科学外的な価値や利害が故に放棄される時にイデオロギー的科学が成立する危険性があると考えるのである。

この章ではさらに、イデオロギーへのアプローチの思想史的展開が、フランシス・ベーコンからフランス啓蒙哲学を経て、現代における様々な理論——実証主義、マルクス主義、知識社会学——に渡って略述されたあと、いわゆるフランクフルト学派の批判理論とポパー、ハンス・アルバートらに代表される批

判的合理主義の、この問題に関する寄与、および両者の対立点が簡潔に整理されている。

終章の第四章では、こうした性格の書物としては異色の構想といえようが、大衆現象としてのスポーツとイデオロギーの関係が、スポーツ哲学（この耳慣れない言葉は、かつてオリンピック漕艇部門金メダリストに輝き、後に哲学者に転身した奇才ハンス・レンクの業績によってドイツではかなりの定着をみせている）、社会学、社会心理学、世界観分析という観点から分析されている。「健全な精神は健全な肉体に宿る」との手放しでのスポーツの正当化や、一部日本のスポーツ界にも見られる過度な規律重視、権威主義、精神主義イデオロギーが批判されるのは言うまでもない。だがさらに著者は、資本主義社会における疎外された生活条件を甘受すべく人間を操作するものとしてのスポーツ、肉体への本来あるべき性的関心、官能性を抑圧するものとしてのスポーツというネオマルクス主義的スポーツ批判にも反批判をあびせている。

だが、様々な意味でのスポーツのイデオロギー性を最も如実に体現しているのは、何と言ってもオリンピックであろう。そこに象徴的に示されている世界観的対立——体力の限界への挑戦か、非人間的行き過ぎか、あるいはオリンピックは平和の祭典なのか、国威発揚の場なのか、さらにはそれは政治の垣根を越えた祭典なのか、そもそも、「脱政治」という幻想をふりまくだけのものなのか——の問題を論じることでこの章は結ばれている。

四

さて、駆け足で本書の概略を要約してきたが、最後に評者なりの問題点をいくつか指摘しておきたい。

まず第一に、著者サラムンが執拗なまでにこだわるイデオロギー的戦略の類型化の問題性が挙げられる。なるほど百面相的なイデオロギーという現象をなんとか客観的に捉えようとする著者の意図はかうのだが、基本的にイデオロギーとは自分の役に立つものであれば、それをすべて利用しつくすものである。その手口のひとつひとつを類型化しようというのは、いわば後知恵にとどまり、類型化作業の本来の目的たるイデオロギー識別の効果を発揮できぬままの徒労に終わってしまうのではないか。

第二に、イデオロギー論の自己回帰性の問題がある。自分自身の立場もまたイデオロギー的であるという反省を欠いて、自分の足場だけは特権的に正しいものと構成することは、もはやマンハイム以後の現代イデオロギー論には許されない。だがサラムンが、この特権的立場を科学に求めているのは明らかである。なるほど彼は、科学のイデオロギー化の危険性を充分承知し、それを分析はしている。だがサラムン自身のイデオロギー性に向けられた嫌疑は、それだからと言って消えてしまうものではない。彼自身が「絶対的真理への要求」をイデオロギー戦

略の一類型とみなしているだけに、このことはなおさら自己回帰的、自己否定的なものとなって彼自身に投げ返されよう。

第三に、科学、政治、倫理の三者の関係が、いかにも啓蒙主義的オプティミズムに彩られた調和のうちに描かれていることも、評者としては単純にすぎるように思われる。このことはサラムンがしばしば引き合いに出すM・ウェーバーのペシミスティックなトーンとあまりにも対称的なので特に目につく点である。

以上若干の疑問を呈しておいたが、総じて、本書は、もともと専門誌に発表された論文が大半を占める割には、記述も平易で、様々な学説の紹介も極めてバランスよく、よく整理されており、イデオロギー問題に関心のある初学者への格好の入門書となろう。逆に言うならば、個々の論点について、やや掘り下げが足りないという印象もないわけではないし、本来、相容れない諸説が往々にして並列的に列記されたまま、全体の議論との有機的関連性が不明確に終わっている点もある。しかしガイガーの『イデオロギーと真理』、ウェルドンの『政治の論理』以来、この種の立場からのイデオロギー論がわが国ではほとんど紹介もされず絶えて久しいことを考えれば、本書の価値は決して過小評価できないであろう。

（なお本書は今年中にも、評者訳で慶應通信から刊行の予定である。）

萩原　能久